

「楽しく歌いましょう！あなたが主役,生涯学習・歌の会」講座研究(3)

—歌の高齢初心者講座開講3年目・東日本大震災を越えて—

津田 満璃

はじめに

聖徳大学オープン・アカデミー (SOA) 講座「楽しく歌いましょう！あなたが主役,生涯学習・歌の会」(以後「歌の会」と略称)は2008年秋に1クラスで開講した。4年目の2011年秋は4講座募集で3講座計62名の受講者でスタートしている。

これまでの2年間の講座研究は、「聖徳大学生涯学習研究所紀要—生涯学習研究—8」(2010年3月),及び同紀要9号(2011年3月)に発表された。これは3年目1年間の記録・分析研究である。この研究の目的は、講座を客観的に研究するだけでなく、講座自体のあり方はこれで良いのか、又、どうあるべきか、何をすることができるのかを考えながら観察し、記録を取り、アンケート・反省会なども通じ受講者の反応・要望を聞き、文献を読み、現場の講師たちの意見を聞き、この講座が社会貢献のニーズに合ったものとして発展出来るように研究からサポートへと繋げることもある。

今回の研究は2010年秋学期から2011年春・夏学期の1年間に行われたこの講座を対象に行われた。この期に起こったことで一番大きかったのは、2011年3月11日(金)の東日本大震災であった。当日、月・水・木曜日開講のこの講座はなかった。SOA事務局は余震と停電による混乱を避けるための休講通知に1週間明け暮れた。1週間の休みを置き受講者達が出席したクラスは節電で薄暗かった。受講者たちは震災当日の様子を話し体験を共有し、お互いの無事を確かめあった。それは互いに癒され勇気づけられる一時となった。余震が続き震災の余波の冷めない中、体の不自由な者は欠席だった。節電のために電車が間引き運転中という状況では、外出への家族の同意が得られないのも仕方が無いことだった。2011年4月のSOA講座受講生数はかなり減少したが、そういう中だからこそ皆で一緒に歌いたいという受講生がほぼ同数戻ってきてくれたことに、主催者側としては大変励まされた。高齢者の孤独対策

も兼ねたゆるやかな小さいコミュニティ形成も「歌の会」の目的の一つだからである。

更に特筆すべきは、「楽習フェスタ2011」への参加である。2011年6月12日(日)、聖徳大学生涯学習研究所主催の「楽習フェスタ2011」・歌声喫茶午後の部に「歌の会」も参加でき、1時・2時・3時の部3回歌唱指導を行なった。1時と3時の部はピアノは柴山、歌は峯田が、2時の部はピアノは峯田、歌は柴山と「歌の会」の講師達が指導を担当した。いつもの講座では予算の関係から講師は1講座1名だが、フェスタでは2名の講師がピアノと歌を別々に担当するという豪華版になった。会場の特性から声が良く反響し上手に聞こえたと参加者達は喜んだ。ヴォーカル指導が付き、いつもの講座より歌いやすかったということも言えるだろう。「歌の会」はもっと発展し予算が許すようになれば、ピアノと歌唱指導の2名の講師を付けることが可能になるだろうが、今の様子ではまだ先のことだろう。「楽習フェスタ2011」・歌声喫茶への参加は受講者も大いに楽しめ、講師たちにも新しい試みとして勉強になった。次の機会にも「歌の会」として参加していきたい。

当日のテキストは「歌の会」講座の特徴である高齢初心者用の音程に調整した楽譜を間に合う範囲で用意した。用意をするために楽譜著作権侵害の無いようにネットを使って調べた。講座の目的に合った独自の楽譜作成を目指しているので、著作権についても少しずつ勉強していかなければならない。

I. 開講3年目3期1年間の経過

(1) 講座観察・記録

研究対象期間は2010年10月から2011年7月に掛けての3期1年間である。まず2010年度第Ⅱ期(秋)は月・水・木A午前・木B午後の4クラス開講となった。2010年度第Ⅲ期(冬),及び、2011年度第Ⅰ期(春・夏)は木Bが不成立で以後3クラス開講となっている。講座観察は重要

だという認識は変わらないが、過去2年余りの毎講座の詳細な観察・記録に対し、それが同じことの繰り返しになってきた3年目は変化、問題点、及び、講座の未来への建設的な発想を記録することになった。

(2) 受講者数・性別・年代推移

まず、この3期1年間の各受講者数、性別、継続か新規受講か、「歌の会」講座全体の受講者数推移を整理しよう。

2010年度第Ⅱ期(秋)：合計54名

2010/09/27-12/06(月・10回)13:00-14:25

受講者10名(新規開設, 継続5, 新規5, 内・継続男性2)

2010/09/22-12/01(水・10回)10:45-12:10

受講者11名(継続9, 新規2, 内・継続男性2)

2010/10/07-12/09(木A・10回)10:45-12:10

受講者26名(継続23, 新規3)

2010/10/07-12/09(木B・10回)14:45-16:10

受講者7名(新規開設, 継続2, 新規5)

2010年度第Ⅲ期(冬) 震災により講座修了が1週間延びている：合計50名

2011/01/17-03/28-04/04(月・10回)13:00-14:25

受講者16名(継続8, 新規8, 内・継続男性2・新規男性1)

2011/01/12-03/16-03/23(水・10回)10:45-12:10

受講者11名(継続11, 内・継続男性2)

2011/01/20-03/24-3/31(木A・10回)10:45-12:10

受講者23名(継続21, 新規2, 内・新規男性2)

2011/01/20-03/24(木B・10回)14:45-16:10

受講者不足により不成立

2011年度第Ⅰ期(春・夏)：合計50名

2011/04/18-06/27(月・10回)13:00-14:25

受講者13名(継続10名, 新規3名, 内・継続男性2・新規男性2)

2011/04/20-07/06(水・10回)10:45-12:10

受講者14名(継続9名, 新規5名, 内・継続男性2)

2011/05/12-07/14(木A・10回)10:45-12:10

受講者23名(継続20, 新規3, 内・新規男性1)

2011/05/12-07/14(木B・10回)14:45-16:10

受講者不足により不成立

次にこれら全体の受講者推移に、更に年代別も加え下記のように表(表1)にし、分析しよう。

表1：受講者数・新規継続者数・年代別表

(2010年度第Ⅱ期～2011年度第Ⅰ期) [男性人数は()内に示す] (人数)

	合 ク ラ 計 ス	継 続	新 規	50 代	60 代	70 代	80 代	答 無 者 回
2010年度/Ⅱ期 (秋・月)	10 (2)	5 (2)	5	0	8 (1)	2 (1)	0	0
2010年度/Ⅱ期 (秋・水)	11 (2)	9 (2)	2	1	8 (1)	2 (1)	0	0
2010年度/Ⅱ期 (秋・木A)	26	23	3	3	13	7	2	1
2010年度/Ⅱ期 (秋・木B)	7	2	5	0	3	3	1	0
2010年度/Ⅱ期 合計	54 (4)	39 (4)	15	4	32 (2)	14 (2)	3	1
2010年度/Ⅲ期 (冬・月)	16 (3)	8 (2)	8 (1)	0	10 (1)	6 (2)	0	
2010年度/Ⅲ期 (冬・水)	11 (2)	11 (2)	0	0	10 (1)	1 (1)	0	0
2010年度/Ⅲ期 (冬・木A)	23 (2)	21	2 (2)	2	11 (2)	7	2	1
2010年度/Ⅲ期 合計	50 (7)	40 (4)	10 (3)	2	31 (4)	14 (3)	2	1
2011年度/Ⅰ期 (春・月)	13 (4)	10 (2)	3 (2)	0	9 (3)	4 (1)	0	0
2011年度/Ⅰ期 (春・水)	14 (2)	9 (2)	5	0	9	4 (2)	1	0
2011年度/Ⅰ期 (春・木A)	23 (1)	20	3 (1)	1	9	9 (1)	2	2
2011年度/Ⅰ期 合計	50 (7)	39 (4)	11 (3)	1	27 (3)	17 (4)	3	2
総合計	154 (18)	118 (12)	36 (6)	7	90 (9)	45 (9)	8	4

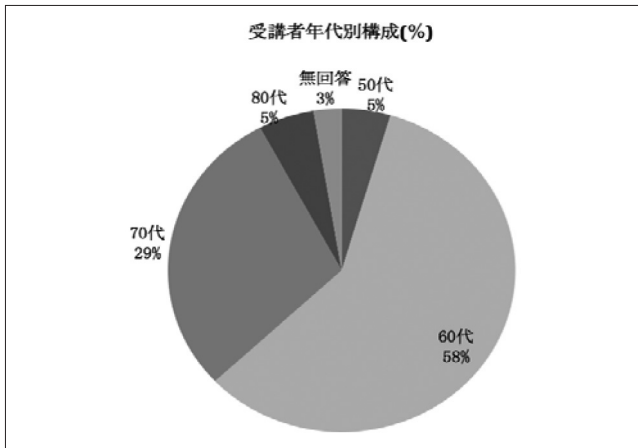
3年間の受講者数推移：受講者数は2010年度第Ⅱ期(秋)、第Ⅲ期(冬)から2011年度第Ⅰ期(春)に掛け、各期の3から4クラスの受講者数合計は54名、50名、50名と推移し、この1年間の延べ合計受講者数は154名である。2008年秋からの1年目、2009年秋からの2年目、2010年秋からの3年目の各年間延べ合計受講者数は56名、133名、154名と推移している。東日本大震災後の春・夏講座の受講者数はその前と同数に留まったが、この時期SOA全体の受講者数が大きく落ちているなかで、この受講者数にはこの講座に対するかれらの期待を感じる。

男性受講者と共に：この1年、男性受講者に関し3期合計12名、内新規6名と徐々にではあるが定着する傾向にある。男性受講者にも自覚があるが、世代が上がるほど声を出す機会が減る傾向にある。発声練習のあり方と発声力維持、音とリズムの理解と歌い方、コミュニケーションの楽しみを取り入れるなど、昼間の講座で男性受講者も学習を継続できる方法論を開発していきたい。

受講者年代：60代が延べ90名、70代が45名と60代の半数、50代と80代がそれぞれ7名、8名となっており、50代から80代で全ての受講者年代を構成している。中でも60代と70代を中心としており、これはずっと同じ傾向で

あり、「歌の会」活動の年代構成は安定していると言える。

「歌の会」の目標は、懐かしい歌の斉唱を通じ高齢初心者に歌うことの楽しみと同時に、外出やコミュニケーション機会を提供し生活の質を保つことに貢献することにある。そのために、これからの受講者年代層目標として、年代の山が60代から70代に掛けてあるところを70代から80代へと後に持っていくことが高齢化社会に役立つであろう。そのための方法論の開発も進めたい。



II. アンケート実施・分析

(3期1年分, 2010年9月～2011年7月)

(1) アンケートについて

「歌の会」開講3年目のアンケートは、SOA 全体のもの(1枚)と「歌の会」独自のもの(2枚)を3期とも講座の終りに各クラスで実施した。最終回の前の週にアンケート

用紙2種3枚を綴じて配付し、最終回に書き込んだものを提出することにした。回収できなかったアンケート用紙はそのままになっている。書き込みの無い項目もあった。例えば、歌のリストへの良し悪しの回答にも全てに「良い」を付ける者もいれば、回答しない者もいた。集計は回答の通りに数えた。回収アンケートは各講師とコーディネーターがコピーを共有し、討議、反省資料としている。

2008年秋から2010年春に渡る2年間のアンケート調査・集計・分析により同期の各クラスの傾向は似ていることが分かった。よって同期のクラス毎の集計は止め、各期毎に全クラスをまとめて下記のように表2.SOA アンケートと表3.「歌の会」独自アンケートとして集計する。

SOA アンケートと「歌の会」独自アンケートの集計・分析を通し、「歌の会」に関する過去1年間の問題点を整理し、次年度への準備・課題としたい。

(2) SOA 公式アンケート集計・分析 (3期分, 表2-1・表2-2・表2-3 参照)

まず、SOA 公式アンケート結果を集計する。2010年度第Ⅱ期(秋, 月・水・木A・木B, 4クラス), 2010年度第Ⅲ期(冬, 月・水・木A, 3クラス), 及び、2011年度第Ⅰ期(春・夏, 月・水・木A, 3クラス)の開講時期順に各期毎の全クラス集計とする。

さて、「歌の会」受講者によるこれら3期1年間のSOA 公式アンケート集計表分析から何が言えるだろうか。

「講座の感想」としては、3期1年間を通じ94%という

表2-1: SOA公式アンケート2010年度第Ⅱ期(秋, 月・水・木A・木B, 2010/09/22～12/09), 回答者38名/在籍者54名

講座の感想	満足 27	やや満足 6	普通 4	やや不満 1	不満 0	
満足・やや満足の理由	内容 8	費用 1	教室・施設 2	担当講師 14		
やや不満・不満の理由	内容 1	費用 0	教室・施設 0	担当講師 0		
難易度	理解丁度よい 14	難しかった 4	易しかった 6			
受講理由	内容に関心 27	担当講師 5	大学主催 2	立地 3	受講料 1	他に無い 0
	その他 1					
受講目的	教養 3	余暇有効 5	交流 2	仕事に生かす 0	趣味・娯楽 26	その他 2

表2-2: SOA公式アンケート2010年度第Ⅲ期(冬, 月・水・木A)(2011/01/12～04/04), 回答者35名/在籍者50名

講座の感想	満足 28	やや満足 5	普通 2	やや不満 0	不満 0	
満足・やや満足の理由	内容 9	費用 1	教室・施設 2	担当講師 19		
やや不満・不満の理由	内容 0	費用 0	教室・施設 0	担当講師 0		
難易度	理解丁度よい 30	難しかった 1	易しかった 4			
受講理由	内容に関心 25	担当講師 7	大学主催 0	立地 2	受講料 1	他に無い 0
	その他 2					
受講目的	教養 1	余暇有効 10	交流 2	仕事に生かす 0	趣味・娯楽 22	その他 1

表2-3:SOA公式アンケート2011年度第Ⅰ期(春・夏, 月・水・木A, 2011/04/18~7/14), 回答者35名/在籍者50名

(数字:回答票数)

講座の感想	満足 29	やや満足 6	普通 0	やや不満 0	不満 0	
満足・やや満足の理由	内容 12	費用 1	教室・施設 1	担当講師 21		
やや不満・不満の理由	内容 0	費用 0	教室・施設 0	担当講師 0		
難易度	理解丁度よい 27	難しかった 0	易しかった 6			
受講理由	内容に関心 24	担当講師 5	大学主催 4	立地 1	受講料 1	他に無い 0
	その他 0					
受講目的	教養 0	余暇有効 8	交流 0	仕事に生かす 0	趣味・娯楽 25	その他 1

絶対的多数が「満足」か「やや満足」と応えている。満足の理由としては「内容」と「講師」で77%を占めている。特に各クラスとも担当講師に票が集まっている。講座内容と教授法への理解が定着したきたようだ。「内容」に「やや不満」が全期を通して1名いる。この点に関しては「歌の会」独自アンケート結果と合わせて考えたい。

「難易度」としては、回答者中、「理解丁度よい」66%、「難しかった」5%、「易しかった」15%である。「楽しく歌いましょう」なのだから難しくないと受講者たちは期待していると繰り返して言うが、5%の受講者は難しかったという。この点についても「歌の会」独自アンケート結果と合わせて考えたい。

「受講理由」の最多は「内容に関心」で70%、次に「担当講師」16%、「大学主催」と「立地」それぞれ6%の回答である。内容と講師が86%を占め、大学主催という質への安心と立地の良さも大切だということも頷ける。

「受講目的」では、多い方から「趣味・娯楽」が68%、「余暇有効」21%となっている。「交流」は4%であり、(3)で集計する「歌の会」独自アンケートでは歌の友だちが出来

たことを喜んでいるという結果が出るにしても、それが受講目的ではなかったことが分かる。

1年前の「受講理由」では「内容に関心」が71%、「受講目的」では「趣味・娯楽」が72%と最多であったが、その傾向は安定しているといえよう。

「受講理由」と「受講目的」の「その他」に「心身健康のため」、「老化防止」、「声だし」、「ボケ防止」などの書き込みがあった。これは最初の自己紹介や最後のランチ反省会でもよく聞かれることである。これらは「歌の会」の目的でもあるが、会としてはこの目的はパンフレットには書いていないが、受講者側での目的意識としてはあるようだ。

(3)「歌の会」独自アンケート集計・分析(3期分, 表3-1・表3-2・表3-3参照)

次に、この1年間3期の各学期の終りに行なった「歌の会」独自アンケートを、2010年度第Ⅱ期(秋, 表3-1)、2010年度第Ⅲ期(冬, 表3-2)、2011年度第Ⅰ期(春・夏, 表3-3)の開講時期順に集計する。

表3-1: 独自アンケート2010年度第Ⅱ期(秋, 月・水・木A・木B, 2010/09/22~12/09), 回答者38名/在籍者54名

(数字:回答票数)

1. 良かった歌(最多のみ): 浜辺の歌 18, エーデルワイス 17, 大きな古時計 13, 星に願いを 13, 枯葉 11, 禁じられた遊び 11, 恋は水色 11, 里の秋 11	2. 難しかった歌(最多のみ): 枯葉 10, 少年時代 3, 恋は水色 2, オーラリー 2	3. 歌いたくない歌(最多のみ): 一寸法師 3, むすんでひらいて 2	4. 難しかった理由: 音が高過ぎる 1 リズムが取り難い 11 知らない歌 2
5. 好きな歌のジャンル: 演歌・歌謡曲 5 童謡・唱歌 22 ポップス 4 日本伝統音楽 1 クラシック 5	6. 一番好きな歌: 7. クラスで歌いたい歌: 8. 家庭で口ずさむ歌: 6,7,8. は回答無しも多いが、各自様々な歌の回答	9. 普段大きい声を出す機会: ある 15, ない 19	10. この会に参加の結果: 声が前より: 出る 34, 出ない 3 歌が上手に: なった 26, ならない 8 体が健康に: なった 30, ならない 5 楽しい時間を過ごす: 楽しい 34, 楽しくない 0 歌の仲間: できた 32, できない 2

表3-2：独自アンケート2010年度第Ⅲ期(冬,月・水・木A)(2011/01/12~04/04),回答者35名/在籍者50名

(数字:回答票数)

1. 良かった歌 (最多のみ): 今日のはさようなら 19, 遠くへ行きたい 19, 赤いサラファン 16, ラ・ノヴィア 16, 今日でお別れ 15, 銀色の道 15, 雪の降る町を 15, 荒城の月 14, さとうきび畑 14, 月の沙漠 14, 眠りの精 13	2. 難しかった歌 (最多のみ): シューベルトのセレナーデ 13, さとうきび畑 6, 眠りの精 4, ラ・ノヴィア 4	3. 歌いたくない歌 (最多のみ): 一月一日 3, 赤い鳥小鳥 2, 365歩のマーチ 2, 聖者の行進 2, 線路はつづくよどこまでも 2, どじょっこふなっこ 2, むすんでひらいて 2, 雪 2	4. 難しかった理由: 音が高過ぎる 1 リズムが取り難い 10 知らない歌 3
5. 好きな歌のジャンル: 演歌・歌謡曲 3 童謡・唱歌 19 ポップス 6 日本伝統音楽 1 クラシック 7	6. 一番好きな歌: 7. クラスで歌いたい歌: 8. 家庭で口ずさむ歌: 6.7.8. は回答無しも多いが, 各自様々な歌の回答	9. 普段大きい声を出す機会: ある 13, ない 18	10. この会に参加の結果: 声が前より: 出る 30, 出ない 2 歌が上手に: なった 25, ならない 4 体が健康に: なった 26, ならない 1 楽しい時間を過ごす: 楽しい 35, 楽しくない 0 歌の仲間: できた 30, できない 2

表3-3：独自アンケート2011年度第Ⅰ期(春・夏,月・水・木A,2011/04/18~7/14),回答者35名/在籍者50名

(数字:回答票数)

1. 良かった歌 (最多のみ): 今日のはさようなら 19, 夏の思い出 17, 知床旅情 16, みかんの花咲く丘 15, 上を向いて歩こう 14, 川の流れるように 13, サンタルチア 13, さくら貝の歌 12, 真夜中のギター 12	2. 難しかった歌 (最多のみ): 川の流れるように 10, さくら貝の歌 6	3. 歌いたくない歌 (最多のみ): せんせい 4, チューリップ 2, 水あそび 2, 君といつまでも 2	4. 難しかった理由: 音が高過ぎる 7 リズムが取り難い 8 知らない歌 3
5. 好きな歌のジャンル: 演歌・歌謡曲 1 童謡・唱歌 16 ポップス 11 日本伝統音楽 1 クラシック 3	6. 一番好きな歌: 7. クラスで歌いたい歌: 8. 家庭で口ずさむ歌: 6.7.8. は回答無しも多いが, 各自様々な歌の回答	9. 普段大きい声を出す機会: ある 15, ない 19	10. この会に参加の結果: 声が前より: 出る 31, 出ない 3 歌が上手に: なった 26, ならない 8 体が健康に: なった 27, ならない 5 楽しい時間を過ごす: 楽しい 35, 楽しくない 0 歌の仲間: できた 31, できない 4

アンケート・ナンバーを追って集計を見てみよう。

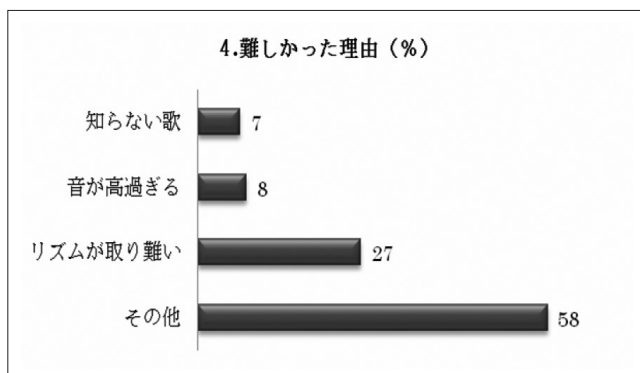
1.2. どの講座も「歌の会」独自アンケートは共通であるが、講師が異なると選曲が異なり、アンケートの歌のリストも異なる。各講座参加人数も異なるが、数字は各期全体の集計となっている。2010年度第Ⅱ期の「枯葉」には「良かった歌」として11票、「難しかった歌」として10票と両方にはほぼ同票集めた。オリジナルの音程ではなく、音程に無理の無い楽譜を選び、講師としては易しい歌だということスタートしたが、このシャンソンを知らない受講者が居たことと、語り歌の難しさがあったのだろうか。2010年度第Ⅲ期では「シューベルトのセレナーデ」は「良かった歌」10票に対し、「難しかった歌」として13票を集めたのが目立った。その他、「良かった歌」にも上位を占めながら「難しかった歌」にも入った歌に、「ラ・ノヴィア」4票、「さとうきび畑」6票、「眠りの精」4票があった。この点では、2011年度第Ⅰ期では「川の流れるように」

13票:10票(「良かった歌」:「難しかった歌」)と「さくら貝の歌」12票:6票が目立った。歌いたい歌と歌える歌、好きな歌と歌える歌の間にはいつも開きがあり、出だしを口ずさんでいる分には問題ないが、ピアノに合わせて全ての歌詞を始めから終りまで歌うとなると、高齢者初級クラスでどのように受講者の要望に依っていかのか、どのような練習プログラムを組んでいくのが良いのか解決すべき問題である。

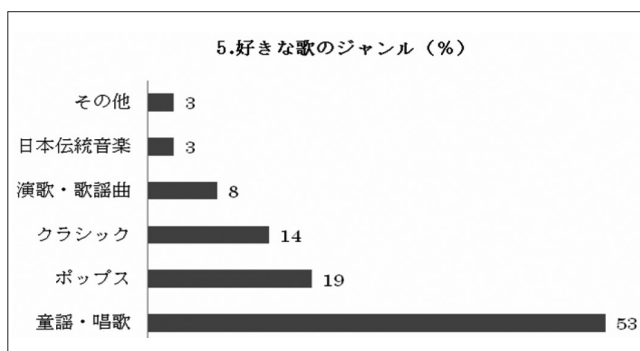
3. 「歌いたくない歌」を年間集計してみると、多い方から「むすんでひらいて」4票、「せんせい」4票、「一寸法師」3票、「一月一日」3票となる。あと、ジャンルとしては単純な童謡が多い。特に昔話の歌があれば必ず歌いたくない歌に少し票が入る。講座で公に受講者達に聞くと、全体としては特別歌いたくないと言う訳ではないという回答になる。孫のいる人とそうでない人の違いがあるのか、ただ幼稚な歌は嫌いということなのか注意していきたい。

4. 歌が難しかった理由として、3期の全回答中「知らない歌」は回答者の8票・7%、「音が高過ぎる」は9票・8%、「リズムが取り難い」は29票・27%、その他（回答無し）58%となっている。

まず「リズムが取り難い」という27%の回答を重く受けとめ、これからリズム練習の教授法についても考えていかなければならない。次に、「音が高過ぎる」8%という指摘に関し、音程は大体下げているが、移調については歌の性格によることもあれば、講師の考えによることもあるようだ。初心者講座を目指すには8%は無視出来ない指摘数である。3つ目の「知らない歌」だから難しかったが7%である。これは少しずつゆっくりと重ねて練習し、クラスで慣れを作りながら歌っていくなどの工夫で新しい歌に親しめるようになるだろう。「楽しく歌いましょう」と会のタイトルに入れている「歌の会」が難し過ぎてはいけな。又、何故難しいのかを自覚しない者も居るので、これらの数字は控えめだろう。難しいと指摘のあった点についてはよく考えていきたい。



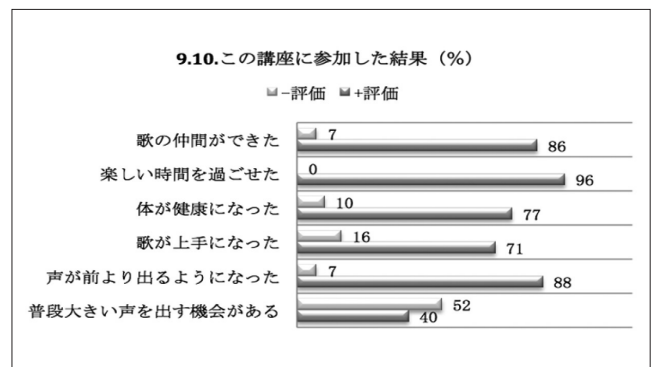
5. 「好きな歌のジャンル」として、3期の全回答中「童謡・唱歌」57票・53%、「ポップス」21票・19%、「クラシック」15票・14%、「演歌・歌謡曲」9票・8%、「日本伝統音楽」3票・3%、となっている。人気の順に「童謡・唱歌」、「ポップス」、「クラシック」、「演歌・歌謡曲」、「日本伝統音楽」となる。これは、講座がほぼ首都圏にあるという地域的なものなのだろうか。60代70代の初心者の歌に対する嗜好が教育やメディアからの影響でそうなっているのだろうか



か。ともかく、今のところこのような受講者の嗜好に合う歌を提供していくことになるだろう。

6.7.8. どのような歌が一番好きか、クラスで歌いたいか、家庭で歌っているかの質問に対しては、回答無しが多いが、実に様々な歌が寄せられ、以後の選曲の参考になる。特徴としては懐かしい歌、世間でよく歌われた歌に受講者の好みがあるようだ。授業や反省会で直接お聞きすることもあるが、どの歌も大好きですという反応が一般的である。講座の曲目選択はアンケートや講座での反応を元にそれぞれの講師が担当している。

9. 「普段大きい声を出す機会」があるかないかの質問に対しては、「ある」43票・40%に対し「ない」56票・52%と大きい声を出さない受講者の方が多い。特に、他人に声を聞かせられないという受講者が多い。



10. この講座に参加した結果を1年間集計すると、「声の前より」出るようになった者が95票・88%と、「出ない」と回答した8票・7%に比べ圧倒的に多い。受講者からは年と共に声が出なくなるので声が出るようにと「歌の会」に参加したという話をよく聞くので、目的はかなり達成されているといえる。「歌が上手になった」77票・71%も「ならない」20票・16%に対しかなり多い。「体が健康になった」は83票・77%で、「ならない」は11票・10%である。結果として「楽しい時間を過ごす」104票・96%と楽しく過ごさせているようだ。「楽しくない」0票・0%というのは主催者としては有難いことである。「歌の会」では歌を通じた仲間ができることを大きな目的の1つにしている。継続には仲間が居ると感ずることが必要だと考えるからである。「歌の仲間ができた」93票・86%、できない8票・7%という結果からすると、先のSOAアンケートにおける「受講目的」としての「交流」は4%でそう大きな目的ではなかったが、受講した後では仲間ができたことと86%の受講者が感じている。お茶の時間の交流が楽しいと聞き、又、そういう書き込みもある。ただし、8票・7%の受講者は仲間はできなかったという。歌って楽しむのに必ずしも仲間がいなくても、歌うことはそれだけで楽しいということも言

える。仲間に入りたくても新規の受講者は入り難いということもある一方、必要が無いという者もいるだろう。この点は観察を深めやりすぎないように対応していきたい。

(4) 講座開始後3年目1年間のアンケート2種分析結果への追記

「歌の会」の趣旨は受講者に少しずつ理解されて来ている。開講の挨拶やランチ会やアンケートや反省会で、この講座が初心者対象の斉唱クラスであることを繰り返し説明してきた。不満回答が無くなってきたことに現れているだろう。

それでも、2010年度第Ⅱ期のこの高齢初心者講座に間違っ入ってきた上級者がいた。この高齢初心者の斉唱講座に上級者が参加した場合、講座レベルに満足せず講師に高度な要求をし講師もその要求に応えようとし、他の初級者は付いていけないということが起こった。初級者のことは上級者には分かり難いようだ。講座のターゲット受講者に合わせた授業内容がかなりぶれた結果、両者に不満が残るこのクラスは存続出来なかった。この講座開講時間帯に問題があったのかも知れないが、他の講座開講状態から判断して必ずしも時間帯故だとは言いきれない。特に自由書き込みからも分かることであるが上級者の不満は大きく、講座としては多少無理をして合わせたとしても結局は続けられない。又、初級者は付いていけないクラスは止める。この件からも募集時に講座レベルなどの特徴を十分に説明する必要があることを痛感した。

3年間ほぼ似たようなアンケート集計をしてきたが、高齢初心者斉唱講座という基本コンセプトは同じであり、継続者も多く講座の特徴が固まってきたようだ。

Ⅲ. 文献研究

この講座を直接サポートできる先行文献がほぼ無いらしいことがまず問題である。筆者は文化社会学者として、又、高齢化の先行したヨーロッパで高齢者たちと長く歌の有る暮らしをしてきた体験から、高齢化に追いつき追い越しつつある日本社会への貢献として私的な考えでこの講座をスタートさせた。そして、少しずつ多くの受講者の支持を得るのを見るにつけ、この超高齢化社会実験講座の一つをどのように育てていくのがこの時代・この社会に良いのかを研究しサポートする責任と必要が出てきた。そのために、まず現状観察・分析からスタートし、問題点から改良点を見だし、この講座運営の正当性を保証しようとしてきた。そして、講座サポートのために現場の意見による改良を目指そうとするだけでなく、できるだけ広く近似関連

領域の例や文献を参考にすべく渉猟しており、これは過去1年間のその記録である。取り上げなかった例や文献もいろいろあるが、文献渉猟記録が講座記録・アンケート分析の後に来た理由である。講座の持つ問題点をなるべく説明でき、解決に近づけ、発展させるために他の研究を調べている。

なかでも音楽療法の研究が音楽研究の中ではわれわれの分野に近く参考になるが、療法と銘打っているように治療を中心に据えているようで、健常高齢者のための歌の初級生涯学習講座研究はまたそれなりの研究アプローチが必要なようだ。それでも筆者としては、高齢者が社会弱者になる度合いを少しでも遅らせるだけ長く健康に楽しく過ごせるための生涯学習初級音楽講座研究も音楽療法研究の一分野として担えないものだろうかと考えている。

(1) 『集団歌唱療法を考える』特集（『日本音楽療法学会誌第10巻第1号』, 2010年）

「歌の会」では集団斉唱をしている。以前からヨーロッパの教会ミサに座して歌いながら高齢者の集団斉唱の効用について考えてきた筆者にとり、この特集は興味深い。

1. 青拓美「集団歌唱療法を考える ～声の視点から～」, 日本音楽療法学会誌第10巻第1号, 2010年, pp.41-46

集団歌唱による共鳴の中で、治療と言えるほどの心の豊かさを感じることができる。これは良く知られていることであるが、「弛緩吸気型腹式呼吸」法の説明は新鮮だった。このやり方で呼吸を調えながら発声すると無理なく発声できるという青氏の発声についての説は、筆者が身につけ日頃疑問に思っていた呼吸法と逆であり、これは検討していきたいと思う。¹⁾

2. 牧野英一郎「集団歌唱療法を考える ～伝統文化の視点から～」, 日本音楽療法学会誌第10巻第1号, 2010年, pp.53-60

筆者が西洋音楽の高齢者斉唱グループを3年間コーディネートする傍ら一緒に歌ってきて、それ以前の日本人のコーラス・グループへの参加で感じていた疑問が消えることはなかった。牧野氏による伝統的日本音楽文化の説明でその理由解明の糸口が見つかったようだ。氏による以下の指摘は高齢初心者グループの斉唱教授法開発にも有用と思われる。「集団歌唱を日本の伝統的な音楽文化から考えた。日本の伝統音楽は声楽が主体で、声色や音色による表現に

1) 青拓美「6. 青式呼吸発声法 = 弛緩吸気発声法」 in 「集団歌唱療法を考える ～声の視点から～」, 日本音楽療法学会誌第10巻第1号, 2010年, pp.43-45

は敏感だが和声は用いず、音高も意識する場合としない場合があり、リズムは拍節リズムのみの西洋音楽に比べ、ビート感は薄いが有拍・無拍・伸び縮み・合いの手、など多様であり、集団が声を揃えて始めから終わりまで同一歌詞を歌うスタイルはまれであった。今日でも多くの日本人とくに高齢者は以上のような伝統的感性を、西洋音楽のトレーニングを受けた方を除き、保持している。」²⁾

3. 山口潤子「集団歌唱療法を考える ～実践者の視点から～ (高齢者領域)」、日本音楽療法学会誌第10巻第1号、2010年、pp.65-69

音楽療法は高齢者を対象とする割合が多いという。われわれの生涯学習講座も高齢者の集団歌唱ということでは同じ点もあるが、セラピストとクライアントの関係ではなく、講師と受講者の関係である。しかし、集団歌唱という目的を同じくするコミュニケーション集団に属することから得られる受講者たちの効果には音楽療法と似たものがあるようだ。

4. 林貢一郎、川合佐知子、関谷正子「集団による能動的音楽療法の実践が中高齢女性の動脈硬化指数に及ぼす影響」、日本音楽療法学会誌第10巻第1号、2010年、pp.110-116

能動的音楽療法は健常中高齢女性の動脈硬化予防に役立つのではないかという研究。

(2) 歌

1. 白澤政和監修、北村英子『高齢者のための音楽療法的音楽活動入門～体を動かして・楽器を使って・歌をうたって・・・～』、ひかりのくに株式会社、2003、2011

2. 北村英子『うたいましょう! ポピュラーソング (介護予防・健康福祉ブック3)、(音楽療法的アプローチ集 Vol.1)』、ひかりのくに株式会社、2005

3. 北村英子『介護予防アクティビティにも生かせる音楽療法的音楽活動 (介護予防・健康福祉ブック4)、(音楽療法的アプローチ集 Vol.2)』、ひかりのくに株式会社、2006

上記3冊は音楽療法解説付き高齢者対象の音楽療法の歌のテキストであるが、ドレミを書き込むなど健常高齢初級クラスの歌のテキストとして参考になる。

4. 澤崎真彦、平澤元『なつかしの音楽教科書～あの小学校6年間はよみがえる』、ヤマハミュージックメディア、2003
昭和30年(1955)教育芸術社発行の小学校音楽教科書からの曲に当時の思い出を書き加えたもの。評判が良かったようだが、現在は絶版。小学校の歌は高音が多かったような気がしていたが、高齢初心者がそのまま歌える音域のものが多いことに驚いている。

5. Cevasco, Andrea M. & Vanweelden, Kimberly, An

Analysis of Songbook Series for Older Adult Population. *Music Therapy Perspectives* (2010), Vol.28, pp.37-78

北米音楽療法誌に掲載された、1900年から1960年代にかけての10年ごとの音楽療法者用の歌のリストを作り直すという試みである。音楽療法を学び実践しようとする学生たちや音楽療法士が高齢者の好む歌を見つけ易くするためである。

(3) 音楽ソフト

健常高齢初心者の斉唱講座用歌の本を作成することとなり、昨年度に続き作曲ソフトを検討した。

1. 『音楽帳5』と『スコア・メーカー』、河合楽器製作所
講座で音楽講師が音程やリズム学習のためにソフトを使う時期はもう少し先になりそうである。しかし、高齢受講者が歌う音程とそのとき見ている楽譜の音程が同じになるように移調済みの楽譜を用意したい。そのために『音楽帳5』の作曲ソフト部分を『スコア・メーカー』と比較しながら検討した。

2. 『finale PrintMusic 2010 日本語版』、e frontier

講座用移調譜を作るために、『スコア・メーカー』と『finale』との間でも記譜の使いがたについて検討した。その結果、「歌の会」では『finale』を採用することになった。

終りに

2011年夏、ブリュッセルの11世紀頃に建てられたサン・クレモン教会のマリア昇天祭のミサに前日と当日参列した。高齢者たちの歌を再び現場で聴くことが目的だった。参列者は高齢者がほとんどで、我々の「歌の会」と同じような年齢構成であった。教会の入り口で貰う本日のミサ予定に賛美歌も書かれている。聖書を借りて、指定ページを見ることもできる。神父の説教の間にオルガン伴奏で参列者の斉唱が何度も入る。コーラスは無い。指揮者の合図で歌う度に全員が立つ。歌詞は単純で、音程が又単純である。高すぎる音も低過ぎる音もない。昔何度もミサで歌ったけれど、発声が大変に楽だった記憶を確かめることも目的の一つだった。キリスト者たちと歌った記憶の中でどれも初めて歌う歌であったが、音に苦勞なく大きい声で歌ったのはどういうことだったのだろうと、「歌の会」を始めてから疑問に思ってきた。2009年のクリスマスにパリのノートルダム教会のミサに参列したが、聖職者たちの中で

2) 牧野英一郎「集団歌唱療法を考える ～伝統文化の視点から～」、日本音楽療法学会誌第10巻第1号、2010年、p.59

も歌の専門家集団のオルガンや各パートに分かれた歌に聖歌隊が立派に歌い、参列者は主に観光客と見受けられた。ショーのような見事な音楽付きのミサではなく、地元の人々が集まる観光化されていない教会のミサをもう一度体験したいと思っていた。フランス語圏のパリとブリュッセルの本屋を回ったとき高齢学の本はあったが音楽療法が盛んな様子はなかった。小さいときからミサの度にこのように歌い続けてきた高齢男女達と歌いながら特別な歌の方法開発の必要性が無いことが確認できた。とりたてて宗教実践と考えて歌っているのでは無いだろう。教会に来ることや歌が日常生活の一部となっているのだ。このように生活の中に当然のこととして自分たちの歌がある文化に包まれている人々と歌の関係は、歌う度に立ったり座ったりすることと合わせ、そうでない我々にとって参考になる。

最後に「歌の会」の問題点として見えてきたのは、受講者の音程に合わせるために使用している教科書と歌っている音程が違ふこともしばしば有り、譜を見ながら歌っているのにドレミが分かるようにならないということだ。更に、リズムの基本学習を取り入れる必要もある。この度、これらの問題点を解決すべく新しいテキストを作成することに、文部科学省科学研究費を使えることになった。歌の生涯学習の在り方に関するこの研究を次の段階へと発展させたい。

生涯学習の受講者は、子供たちの学習とは違い速いスピードで学ぶ必要は無い。急いで学習を終えこれから世に出て働こうというのでもない。アンケートに「歌の会」を

職業準備のために受講しているという回答はない。元はとバス・ガイドだった受講者が高齢者とはバスの歌のガイドとして復帰した際、「歌の会」講座が復帰の役に立ったというのが今年1例あったが。「歌の会」は予習・復習・宿題無し、発表会無しでただ毎회가とても楽しく、長く歌い続けられるというのが信条である。60代位でスタートするとしてこれから30年間続けるのだから、学習のあり方はそれなりにおっとり楽しいものでなければならない。「歌の会」では、急がないので1講座の曲数を多くするよりも、発声や音程やリズム学習を丁寧に学習する。高齢初心者の斉唱「歌の会」講座ではそれに相応しい教授法を開発したい。大きい声を出す訓練や音や拍の理解などの基礎学習を大事にしたい。長い間には曲数も自然に増えるだろう。生涯学習は息の長い講座を目指す。寄る年波に挫折せず継続できることは、元気に生きる力となるだろう。

謝辞

本研究は、文部科学省科学研究費補助金の助成を受けたものである。(32517-23653251)

聖徳大学生涯学習研究所 平成23年度活動報告

【主催事業】

■聖徳大学楽習フェスタ2011

～第13回聖徳大学生涯学習フォーラム～

日時：平成23年6月11日（土） 12：45～16：30
平成23年6月12日（日） 10：00～16：00
会場：聖徳大学生涯学習社会貢献センター
主催：聖徳大学生涯学習研究所
共催：特定非営利活動法人全国生涯学習まちづくり協会
後援：千葉県教育委員会、松戸市、松戸市教育委員会、市川市教育委員会、取手市教育委員会、柏市教育委員会
協力：全国生涯学習市町村協議会、聖徳大学オープン・アカデミー、聖徳大学人文学部生涯教育文化学科、聖徳大学児童学部児童学科児童文化コース、生涯学習研究同好会「りりーず」
内容：・記念講演
「今だからこそ考えるスローライフな生き方」
元静岡県掛川市長 榛村純一
・分科会①「震災都市コミュニティ」
分科会②「震災ボランティア活動」
・日本を元気にネットワーク（被災地支援、防災）
・子どもネットワーク（遊びの提供）
・学習体験ネットワーク（SOA体験）
・学生ネットワーク（他大学生とのワークショップ）
・松戸ネットワーク
・コミュニティカフェ など
参加者：1日目 108名
2日目 312名

■生涯学習研究所課題別研究会「ネットワーク」

日時：①平成23年5月20日、②6月17日、③7月15日、④8月19日、⑤9月16日、⑥10月21日、⑦11月18日、⑧12月16日、⑨平成24年1月20日、⑩2月17日、⑪3月16日 18：00～20：00
会場：聖徳大学生涯学習社会貢献センター
主催：聖徳大学生涯学習研究所
内容：①震災ネットワーク
聖徳大学生涯学習研究所所長 福留強
②災害に強い住まい・まちづくり
聖徳大学総合文化学科准教授 蓑輪裕子
③アートでつなぐネットワーク
聖徳大学児童学科准教授 大成哲雄
④ワークショップの技法
聖徳大学生涯教育文化学科教授 西村美東士
⑤地域と子どもの安全ネットワーク
聖徳大学児童学科准教授 神谷明宏
⑥行政支援によるネットワーク
聖徳大学生涯教育文化学科教授 清水英男
⑦哲学からみたネットワーク
聖徳大学女性キャリア学科教授 茂木和行
⑧ボランティアネットワーク
聖徳大学生涯教育文化学科准教授 齊藤ゆか
⑨女性が輝くネットワーク
聖徳大学児童学科教授 木村敬子
⑩イキイキと生きるには
聖徳大学児童学科教授 天野勤
⑪地域と大学のネットワーク
聖徳大学オープン・アカデミー校長 宮坂いち子
参加者：各回約20名

■集まれ！アートパークーからだであそぼうー

日時：平成23年7月10日（日） 10：00～15：00
会場：松戸市中央公園
主催：聖徳大学生涯学習研究所、聖徳大学児童学研究所
共催：聖徳大学人文学部生涯教育文化学科、聖徳大学児童学部児童学科
後援：松戸市、松戸市教育委員会、松戸市社会福祉協議会
協力：スーパーかみとんぼの会、アトリエミルクル、松戸子育てさぼーとハーモニー、松戸まちづくり交流室テント小屋 ほか
参加対象：幼児、小学生
内容：学生企画の子ども向け遊びのワークショップ（新聞紙プール、ダンボール怪獣マツドン制作、粘土遊び、絵の具遊び、パネルシアターなど）
参加者：350名
スタッフ161名（教員11名、学生135名、地域ボランティア15名）

■女子力とまちづくりフォーラム

日時：平成24年1月21日（土） 10：00～17：00
会場：聖徳大学生涯学習社会貢献センター
主催：聖徳大学生涯学習研究所
共催：特定非営利活動法人全国生涯学習まちづくり協会
後援：千葉県教育委員会、松戸市、松戸市教育委員会、市川市教育委員会、取手市教育委員会、柏市教育委員会
協力：全国生涯学習市町村協議会、株式会社富士通研究所
内容：・記念講演「女子力で輝いて生きる」
脚本家 田淵久美子
・分科会①「青少年育成に必要な女子力」
分科会②「女子力を地域で発揮する秘策」
・シンポジウム「女子力でまちは変わる」
参加者：110名

【共催事業】

■創年コミュニティ研究大会

日時：平成23年7月17日（日） 10：00～16：00
会場：東京都立川市上砂会館
主催：創年コミュニティづくり研究大会実行委員会
共催：特定非営利活動法人全国生涯学習まちづくり協会、聖徳大学生涯学習研究所、立川市大山自治会
後援：立川市、立川市教育委員会、立川市社会福祉協議会、立川市自治会連合会、公益財団法人あしたの日本を創る協会、財団法人日本余暇文化振興会、財団法人全日本社会教育連合会
内容：・報告「大山団地自治会にみる都市におけるコミュニティのあり方」
・基調提言「安心・安全のコミュニティづくりと創年活動の進め方」
・シンポジウム「創年コミュニティに求められる役割」 など
参加者：150名

■旅のもてなしプロデューサー特別講座

日時：平成23年9月10日（土） 10：30～17：30
平成23年9月11日（日） 9：00～16：40